

女難の男 2



玉子王子 著

一章 ションベン男子に女子がタマニギ

垣田小学校。

そのひとけのない三階のトイレ。

その男子トイレの並ぶ小便器に三人の男子が立つ。

太めの男子、小柄な男子、普通の男子。

普通が真ん中。

当然のように並んで前を出している。チャックを開けるような面倒なことをせず、三人ともズボンを下ろして玉まで丸出し。

三本と六個。どれも大人でも大きめとみなされるサイズ。

三本ともしっかり先が剥き出しで、その先端が一番下にあるのは真ん中の石垣カジトのモノ。玉はずっしりと太めの男子が一番巨大で、モノの太さでは小柄な男子。

「やっぱりさ、チ○ポは長さだろ」

「おいおい、太さに決まってるだろ」

「力の源はキ○タマ！」

それぞれ、自分の男性器こそ三人の中で一番と考えている。

そして、自分たち三人こそクラスの男子の中で股間のモノによって抜きんでた大物トリオであると。

実際のところ、同等の者も何人かいるが、ことあるごとにそれを誇示する自分たちこそトップと疑っていない。

しかしながら、モノが大きいから男子のリーダーであり、それはクラスのリーダーという事だと信じているのはカジトだけだった。

年の離れた姉たちにその大物をかわいがられ続けた結果、姉たちに反発しつつも「大物＝優れている」という姉たちの考え方を知らず知らず刷り込まれ、信じるに至っている。

「っていうか、最近女子生意気だよな」

「生意気というか……もうクラスを支配してるのは女子だよな」

「そうそう、カジト諦めろよ」

「諦めるかよ。女子なんぞ出来損ないだろが。キ○タマもないんだぞ？」



「そりゃまあ」

「でも、だからこそ……なあ？」

「そうそう、あいつら……自分に玉がないのをいいことに……」

まだ毛の一本もない肉袋、みなずっしりと大きい楕円形の球体を二つ収めた袋が少し引きあがる。思い出していた。

思い出さざるを得ない、ここしばらくの間、分からされ続けているのだ。

男の急所の弱さと、それを持たない女子の優位を。

「ああ、クソ……あの出来損ないどもが、玉ばかり狙ってきやがって」

「確かにそれはムカツクよなあ」

「玉の一つもないくせにな」

じょぼぼぼ、としずかな三階に尿の音。

その後ろから近づく影。

小柄な女兒たち。

カジトラのクラスメイト。六人がトイレのスリッパをはき、そっと三人の後ろに近づく。

そして、こらえきれない笑いをこらえつつ、背後から抱きつく。

「え、ちょ」

「あ、何を……」

「ま、まで……はうっ！」

放尿中に背後からしがみつかれ、驚愕するカジト。

驚いている間に、三人の股間にサッと女兒たちの小さな手が伸びる。

慣れた調子で根元を親指と人差し指でキュッと締め、袋の先にクラスの男子の巨玉を追い込み、しっかり拘束する。

男子一人に女子二人がしがみつく、女子一人が袋の根元を握ると、もう一人が逃げ場を失った玉をがっしり掴む。

「ちょ……」

思わず爪先立ち、顔をこわばらせるカジト。その顔を見上げつつ、にんまり笑う女子。

「カジトー、また性懲りもなく偉そうなこと言ってるねー」

「女の子は出来損ないだって？ 偉いんだねー？ これが付いてると！」

「はぐうう！」

ぎゅううう、カジトの巨玉を握り潰すその女兒、佐村優里は力が強いわけでもない。しかしはっきりと確信していた、今自分がやっている行動が男に対してどれだけ効果的な攻撃かを。

カジトは男子のリーダーなどではない、**勝手にそう思い込んでいる痛キャラ**でしかない。しかし優里は女子のリーダーの一人である。

その優里に合わせて、他の女兒も金握り潰しを実行していた。男子たちの悲痛な声が三階に響く。

「あおおおおお！」

「ちょ、潰れる、潰れるっ！」

爪先立ちで、身動き取れない三人の男子たち。

それにしがみつく女子たちは満面の笑みだ。

「ほらほら、どうしたの？」

「女子なんでこれついてないから出来損ないなんでしょ？」

「っていうか三人ともほんとにゾウさん大きいねー」

「ほんと、こんなの付いてる強い男子に、女の子が勝てるわけないよ！」

「あれ、でも待って……男の子には確か、女の子にはない弱点があるんじゃないかな？」

男子たちの顔と弱点を交互に見つつ、ニヤニヤする女子たち。

左右の男子二人は引きつった笑いを浮かべている。

カジトは、眉を吊り上げる。

「ざけんじゃねーぞ、なんだそのやり取りは。いっつもいっつも、お前ら玉ばかり狙いやがって、たまには正々堂々と……はぐっ！」

ビシ、とデコピンをする優里。仰け反るカジト。

唾を飛ばし、笑い転げる女子たち。転げるといっても、玉袋を締めたり玉を握ったりで派手には動けないが、動ける範囲で頭を振り、足でパタパタと床を叩く。

「ぎゃははは！」

「大げさすぎでしょ！」

「デコピンだよデコピン！」

「ま、デコじゃなくて金だけどね、金ピン！」

「ほーれ、男の肉玉ピンピンピーン！」

ビシビシと、並の男子の数個分サイズの巨玉を指で弾きまくる優里。

「ゆ、優里iiiiiiiiはふっ！ ちょ、あつ、す、すいませんでしたっ！」

「きゃはは！ やつと金負けしたか！」

「玉握られただけでは屁垂れないとか、やっぱカジトは根性あるねー」

「ま、キ〇タマがある時点で、勝ち目はないんだけどね」

「く、く……」

頬を引きつらせるカジトだが、何も言い返せない。更なる金ピンを招くわけにはいかない。

——クツソが……毎日毎日、なんで俺はこう……女難が続くんだよ。

それは女子への彼の態度がまずいからというのが理由の大半だった。

女子たちが三階にやってきたのは、別にパトロールしているわけでも男子全体を監視しているからでもない。

優里が転校してきて、女子たちに金的の有効性を教えた。金的そのものは高い威力を持つが、女子がやると彼女らには睾丸がないだけに男子たちは同じ手での反撃ができず、一方的に急所攻撃を食らうことになる。

多くの男子がそういう女子による金的を恐れて大人しくなる中、女子たちは欲求不満だった。

今も、大物トリオの股間をもみくちやにしている女子たちは満面の笑みである。

自分たちにはない**謎臓器**を一方的に狙い撃ち、自分たちが股間に食らっても全く平気な程度の攻撃でのたうち回らせるのが楽しくて仕方ない。

しかし基本優しい女子たちは男子たちが嫌がらせなり仕掛けてくれないとその楽しい楽しい金的ができない。理由もなく急所攻撃はまずい。

そんな彼女らにとって、大物トリオはありがたい存在だった。三人というよりカジトの女子へのひねくれたというか攻撃的な態度が反撃名目の金責めを可能にしてくれる。

いい玩具なのだ。

今も、その三人がひとけのない場所に行ったなら、何か面白い会話でもするのではないかと期待して追ってきた。狙い通り女性蔑視発言をやってくれたので、こうして軽い金責めが可能な流れになった。

——あー、キ〇タマ潰し最高。この硬柔らかいおキ〇タマをかるーく握り潰してあげただけで、女見下してるイキり系おチン〇ンくんが礼儀正しくなる、屁垂れる……そこを見るのが楽しいのよね。っていうか岳士のキ〇タマまじでかーい。パパのより明らかに大きいもん。っていうか、パパのもこうやって握り潰したいわー。今度握らせてー、って頼んじゃおうかな？

太め男子のを握り潰すのはサッカーが好きな少女、美咲。

サッカー女子なので当然というか、金蹴りが大好きだ。だが現状の流れでは蹴るところまではいけない感じなので、握り潰して我慢している。それでも十分楽しんでいるが。

「で、どうする？」

優里。尋ねられ、カジトは眉をしかめる。

「どうするってなんだよ。曖昧な質問しやがって。玉だけじゃなく脳みそまでねーのかよ……はおおおおお！ しまっ、つい本音をおおお！」

「キ〇タマでお手玉お手玉お手玉ー」



ペンペンペンペン、手首のスナップを生かして巨玉持ち上げの優里。小柄で力もないし、今も別に力など入れていない。しかしカジトはのた打ち回る。

「はふおおおお！ やめてやめてやめてやめて、玉無しの出来損ないにはわからない痛みがああああ！」

金ピンでわからせられたような顔を一瞬したものの、油断するとこれである。

自分は「女難の男」だとカジトは思っている。年の離れた姉三人に玉竿をみっちりかわいがられて暮らしているのはまあ女難といえるが、学校で女子らに玉を狙われまくるのまで不可抗力の運命と考えるのは虫がいいのではないだろうか。

口を滑らせた自称女難男子に目を吊り上げる女子たち。

「なめんじゃねーぞ男性様がよおお！」

「やれやれー！」

「女性蔑視にや金潰し、これ常識」

「もっとパンチだよパンチ！ キ〇タマ狙って！」

「男の子はねえ、女の子と喧嘩しちゃだめなのよ。男の子が女の子と喧嘩したら……キ〇タマ潰されちゃうからね！」

「まあ今はナノ薬で秒で治るから、キ〇タマぐらい潰れてもいいけどさ！」

「そうそう！ だから生意気男子はキ○タマガチ潰しだー！」

叫ぶ女子たち。

玉握りを担当していた二人が、無意識のうちにそれを握り潰していた。

「はぐあああ！」

「ちょ、ま、まあああ！」

爪先立ちで唾を飛ばす小柄と太めの男子二人。

女子の小ぶりに手に握り潰される大物サイズの睾丸四つ。

そして一際小ぶりに女子に巨玉をパンチされ続ける真ん中の男子。

根元を握られ、縮むに縮めない。

揺れる二個玉、狙う女兒パンチ。

「キン、キン、キン、キーン！」

「ふんぐおおおおお！」

「ほれほれ、で、どうするの？」

「だ、だから何をどうするんだよ！？」

「さっきからの女性蔑視発言を、ちゃんと謝るのかどうか」

「おいおいふざけんな、俺は本当のことを言っただけで……はぐっ！」

「はいタマタマにパンチパーンチ。右玉、左玉、右玉、左玉ー」

硬柔らかい弾力ある肉玉を女兒の拳がペシペシと軽く押し潰す。攻撃ともいえない攻撃。しかし急所攻撃だ、のたうつかジト。

と、左右の男子二人。

「あ、謝る！ 玉無しとか生意気なこと言っちゃってすみませんでした！」

「俺も俺も！ 出来損ないとか本当のことを言って申し訳ありませんでした！ あがっ！」

「謝ると見せかけてディスってんじゃねーぞコラ」

「そういうこと言う悪いキンキンはこれですか？ これですか？」

小柄男子の肉玉に女兒の掌がペンペンと叩き込まれる。ほかの部分なら何ともないが、そこだけはまずい。

「ほーれほれ、こんなのが痛いとかマジ？」

「男お股弱すぎでしょ」

「スマセンスマセン、股間強者の女の子様に逆らって申し訳ありませんでしたっ！ だから玉だけはっ！」

「そうやって素直になればいいのよ」

「いじわるされなきゃ、男の子の大事でよわいよわーいタマタマに対して、女の子は優しいんだからね？」

女兒らの細く小さな指の先が四つの肉玉に触れるか触れないかの力で撫でる。

カジトは、眉をしかめる。

「おいおい！ こんな玉無しに謝るとか、お前らクラス最大のチ○コを持つ大物トリオのメンバーかよ！ こいつらチ○コも付いてない、論外野郎どもだぞ！？ あっ」

女子たちの顔。金的を楽しみ、満面の笑みだったのが急にあきれ顔になっていた。

「へー？」

「そこまで言っちゃう？」

「勇気あるねー？ 女の子にそんなこと言ったら、大変なことになるってわかってるでしょ？」

優里。

金責めをやめ、カジトの顔にプルプル卵肌の頬を押し付けるようにして密着する。

「た、大変ってなんだよ」

「あは、だから……キ〇タマがっ！」

「ぐむっ！」

ボス、と膝をカジトの肉玉に跳ね上げる。押し潰し、グリグリとカジトの股間と膝の間で玉を磨り潰すように動かす。

「あおおおおお！」

「このお股の大事な、金の玉が大変なことになるって言ってんのよ！」

「そうだそうだー！」

「女舐めんなコラ！」

「男なんて、お股に変なモノぶら下げてるくせにさ！」

「弱点ブラブラ、男はブラブラー」

仲間二人が屈服した……というより残りの一人が強硬なのでその場の女兒らはカジトを取り囲み、密着して口々に煽る。丸くて幼い女兒声で煽りまくる。

女兒たちの柔らかさと体温を腕、背中、太もも、腹と全身で感じつつ、それについて何か考える余裕はないカジト。

彼にとって最も関心があるのは、太ももの間。優里によって磨り潰されようとしている人体で最も弱い臓器。

「ふんぐおおおお！ ちょ、ちょおおおお」

「潰れろ潰れろ、キ〇タマ潰れろー」

「こんなの付いてたら偉いとかどういうことなのよ」

「ねえ本当にそんなに痛いのか？」

「わからないよねえ、私らタマタマ付いてないし！」

「あー付いてなくてよかった！」

「ほれほら、キ〇タマ摺り潰しー。男のボールが痛い痛ーい。それで、そろそろ素直になってきたんじゃない？」

「ふ、ふざけんな……誰がお前らみたいなカスマン……ああああ！ く、く、わ、わかった！ 謝る！ 玉無しとか言っちゃってすみませんでした！」

「きゃはは！ はい金負け！」

「タマタマ狙えば男は皆素直！」

「でもこいつの場合、すぐ立ち直ってまたなんか言ってくるからねえ」

「ありがたいことですわな」

「しっ！ 玉責めが楽しいからやりたいわけじゃなくて、心ならずもやってるって設定なんだから」

「あ、そうだったそうだった。金責め大好きだから、大義名分金潰しやらせてくれるカジトをありがたく思ってるなんて口に出しちゃだめなんだったわね」

「ありがたく思うのは問題だけど、根性あってすごいわって評価するぐらいならありだよ」

「じゃ、根性あるねー、カジトって」

「ほんとほんと、ありがたいド根性男子ですわ」

カジトは女子らに囲まれつつ、股間を押さえて必死に立っている。周り中女子。ちらちらと、痛がるカジトを見て楽しんでいる。

顔だの腹だのが痛いというなら、彼女らもその痛みを想像して同情もする。

だが、痛い場所がこと睾丸となればそれを持たない彼女らにとっては文字通り想像を絶する。

手足が吹っ飛んでも秒で治せるようなナノメカ入りの薬がコンビニで買える世界なので、当然玉が潰れてもすぐに治せる。だからこそ女子たちは急所痛に悶える男子を安心して笑ってもらえる。

「っていうか、本当にタマタマ痛がってる男の子って面白いよねー」

「キ〇タマ、って名前がすでに反則だよ。キ〇タマ痛いとか、それだけですでにギャグだし」

「ふ、ふざけ……」

「んー？ なんかいったカジト？」

尻を叩いて



なんー？
なんかいったカジット？

サッカー女子美咲、軽く足を振りつつ、スパッツを佩いた自分の股間を押さえる。

下手なことをいったら、お前のここを狙い撃ちだと脅しをかけていた。

普段なら女に対する感情に難がある**癖強男子**としてカジットはそんな脅しには屈しない。

だが今は、ほんの少し前に膝金を食らって身動き取れない状態だ。

さすがに突っ張れず、引きつった笑いを浮かべるのみ。

「いや、別に……」

「きゃはは！ そうそう、**弱点ブラブラ族**は女の子相手にはそうでなくちゃ！」

言いつつ、女子たちは残りの二人の男子のほうも見る。

女子らがカジットに群がったので拘束を逃れたものの、急所攻撃によるダメージで逃げ出すこともできず、どうにかズボンを引き上げて股間のふくらみを両手で押さえて腰を引いて悶えている。

それほど強烈にやられたわけではないので倒れないし、火事でも起きればどうにか無理して走る程度も可能だ。

だが動かないでいいなら一生その場でいたいぐらいのダメージは受けていた。

「きゃはは、見てよあれ！」

「腰振ってる腰振ってる！」

股間を押さえ、腰をグネグネと動かす男子二人を見て手を叩いて喜ぶ女子たち。

しつつ、自分たちも真似しだす。

「こうだよ、こう。キ○タマダンスはこうやるのー」

「きゃははは！」

股間を押さえ、腰をグネグネと動かす女子たち。男子のその姿を数限りなく見て、ちゃんと覚えている。そして誇張して顔真似までしていた。口をしゃちほこのようにして、上目遣いになる金的顔。

「あおおお、タマタマがー」

「ここのボールが痛い痛いの一」

「く、こ、この……」

「あら、どうしたのカジト？」

「何か文句でも？」

「やっぱ、ゴールデンをぶら下げている特権階級様としては、下等生物玉無しクソマンマンが偉そうなこと言ったら許せないってわけ？」

「……」

唇を噛むカジト。

——ふざけやがって、一ミリでも肯定したら玉を総攻撃する口実にするための無理やりの質問じゃねえか。

チラ、と壁を見る。

壁にかけられた時計に。

アナログ時計。針は間もなく授業の時間を指そうとしていた。

——よし、これならいける。すぐチャイムが鳴るぞ。

「おうおう、クソマ○コども。頭いいじゃねえか？」

「あーん？」

「お前らの言う通りだよ！ 下等生物カスマ○コ！ 女のくせにデカイ面しやがって、これはめっちゃ許せんわなあ」

カチ、と音を立てて時計の針が動く。

次は三時間目。

時計の針はその時間を指していた。

しかし、その時計は少し遅れている。

してやったり、という顔のカジト。

その表情に、何かあるのかと警戒する女子たち。

だが、当然何も起こらない。

目線の先を見て、時計があることに気づく女子たち。

「あれ、もう授業？」

「そ、そうだよ。さっさと引き上げろや。そして**卑しく生きることを覚えろや**」

「はー？ わけわかんねーんだけど？」

「っていうか、この時計遅れてるんじゃない？」

「え？ ちょ、そんな……」

「あはは、やっちゃったねえ？ おキ○タマ無くなっちゃうねえ？」

「リンチリンチ、キ○タマリンチ」

「タマタマみんなで交代で蹴りまくろうよ」

「電気あんまで踏み潰すのもいいよね」

和気あいあいの女子たちの中で、青ざめ、冷や汗を流すカジト。

——ヤベえ、ここはまた謝るか……いや、女相手にそんなへーこらしてられるか！ 俺は男だ、しかもチ○コのデカイ、男子のリーダーだ！

勝手に思っているだけだが、本人的には本気である。

どうするか。

悩む時間はない、ニマ、と笑うカジト。

「あ！ お前ら……よし！ 男三人、やるときゃやるぜ！」

「え？」

「うそ、そいつらも……あっ！」

残り二人は、呆然と立っているだけだ。彼らも動き出したかのようなことをいって注意を逸らし、カジトは走り出す。

素早く女子たちの間を駆け抜ける。

取り囲まれて密着されているが、それに手を伸ばして押しのける。

「きゃっ！」

「うぎゃっ！ いやっ！」

悲鳴を上げる女子たち。

カジトは密着した女子のプリンとした尻を揉み、シャツに手を入れて柔らかくて胸より張りだしたお腹を触って、まったくいらぬ胸を撫でる。

突然の痴漢行為に悲鳴を挙げて思わずカジトから離れる女子たち。

「へへへ！ 甘いぜ！」

笑って、素早くズボンを引き上げて巨玉巨竿を収納し、女子の間を走り抜けるカジト。まだ走れる。

しかし度重なる急所攻撃によって、無意識に内股、足をさほど素早く動かすこともできなかった。

となれば、すぐに女子らに追いつかれる。

「こら待てよ！」

「何してくれてんだよ！」

「あ、ま……あぐっ！」

顔を真っ赤にした女子たち。ボス、と拳をカジトの股間に減り込ませる。

股間を庇おうとした手は掴まれ、次々周囲の女子の金パンチが炸裂する。

「あっ、あっ、あああああ！ やめ、やめてっ！」

膝を合わせ、内股。必死で股間の肉を太ももの間に挟み込んで守ろうとする。

だが、女子らの小ぶりの拳は太ももの間に簡単に入り込み、挟み切れない巨玉を直撃する。

「ほーれほれ」

「金的痛い？ 金的痛い？」

「お尻撫でてくれたよねえ？ お礼にタマタマかわいがってあげる」

「こっちはオッパイ揉んでくれてさー」

「お、オッパイなんてねーじゃねえか！ あがっ！」

バシ、と金カップの優里。そのまま握る。

「みんな、足開かせて。順番に玉蹴ろうよ」

「や、やめ……お、お前ら！」

「お、俺たちはその……」

「キ○タマ縮みあがってんでしょ？ もういいから教室戻りなよ」

「お、俺たちは……」

顔を見合わせる二人。

顔き合う。

「俺たちは、お前らと違ってついてんだ！ 逃げるわけねーだろ！」

ズルリ、と一緒にズボンを下げる二人。

縮み上がり、それでもまだまだ並の大人より雄大なシンボルが二本揃って揺れる。

眉をしかめる女子たち。

「へー、これが男の友情って奴？」

「いつまで続くかなあ？」

いいつつ、数人が駆け寄る。慌ててズボンをあげようとする二人だが、さっとシンボルを掴まれ、引き上げられてはもう動けない。

爪先立ちで、両手は太ももの横。ぴんと背を伸ばし、一物を冗談抜きで根元から二十センチ以上は無理やり引き上げられて身動き取れない。

引っ張られて普段より細くなった肉棒の根元にプルンとした無毛の肉袋。中の玉二つも巨玉というしかなく、しっかりと形を主張する。

そうなのはなすすべないとわかっている女兒らは、にんまり余裕顔でツンツンと指で突く。

「あは、タマタマー」

「どうしてほしい？」

「そ、その……あがっ！」

「おぐっ！」

膝。

女兒の小ぶりの膝が、大ぶりの肉玉四つを蹴り上げる。

女兒たちに膝で陰囊を蹴り上げられる。

女兒らは長く玉蹴りを楽しもうと、限界まで手加減している。

それでも、膝金を食らうと内臓を締め潰す苦痛を生み出す。

「あぐっ！」

「ああああ！」

「きゃはは！ こんなに手加減してるのにねー」

「ほんとほんと！」

限界まで加減しても、男子がのた打ち回る姿に女子らは目を輝かせる。これこそ金的の醍醐味、といわんばかりだ。強く蹴れば大きなダメージが出るのは当たり前、強く蹴るならほかの場所でも同じ

ことだ。金的ならではの弱さを実感するには、あくまでも軽くやらなければならない。

「ほーれほれー」

「タマタマ痛いですかー？」

「あは、さっそく後悔してんでしょ？ 女の子に偉そうなこと言わなきゃよかったって」

「後悔なんかするかよ……なあお前ら！」

「あぐっ！ もうやめ……すいませんでした！」

「ああっ、もうこんな奴見捨てりゃよかった！」

「ちょ、なだよそれ！」

「ぎゃははは！」

「男も、その友情も、タマタマを狙われるともろいのねー」

ゲラゲラ笑いながら、女子たちは数分後の授業開始のチャイムが鳴るまで、延々三人の股間を蹴りまくるのだった。

体験版終わり

この後もカジトは自業自得の金潰しを招くまじい言動を取り続けます。それに対してももちろん女子たちは金的の一点狙いで制裁してきます。

続きは製品版でぜひお楽しみください

次の作品にも体験版を作るつもりなので、

よろしければサークルをフォローして見逃さないようにしていただけると嬉しいです